

新たに導入したセントポーリアについて

平井 健一郎

1995年（平成7年）の5月にアメリカ合衆国マサチューセッツの「Cape Cod Violetry」から購入した、セントポーリアの野生種及び園芸品種31品種の生育・開花状況について報告する。

従来から当園が保有していた同一品種であっても、新たに導入した個体といくつかの相違点が見られた。これら31品種の特徴を表に示す。花色の空白欄は、開花に至らず確認できなかったことによる。その他の特徴として、保有株との比較について記述したが、葉の大きさや色は現時点での傾向を示すもので、生育によっては差がなくなる可能性があり、今後更なる十分な観察が必要である。

前川静江著「セントポーリア辞典」（(株) 栃の葉書房）によると、これらのうち、S. Hou-

se of Amani（写真1）と S. Sigi Falls は原種として流通しているが、正式な記載は見当たらない。

S. ionantha の1個体には斑の入るものも見られた（写真2）。

S. diplotricha var. parker, S. grandifolia #237（写真3）及び S. velutina cv. Light は、当園がまだ保有しておらず、最も新しく発見された品種として導入したが、いずれも詳細は不明である。

また、S. goetzeana（写真4）と S. magungensis var. occidentalis は、開花しにくい品種として知られ、今回導入した株においても開花に至っていない。なお、S. m. var. occidentalis の保有株の一つ（縦×横：334mm×314mm）において、1997年1月10日に、2本の花茎に2輪と3輪ずつの計5輪の開花及び蕾が確認された。その原因としては、一昨年から肥培を続けたことが考えられるが、その他の保有株では開花がみられないことなどから、今後開花に適した環境条件の検討が必要である。

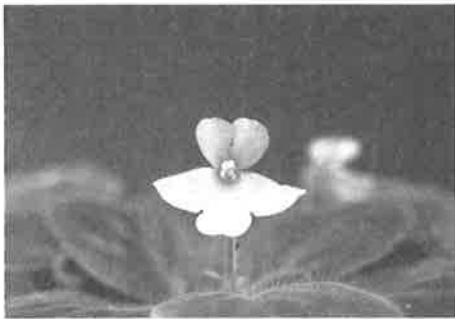


写真1 S. House of Amani

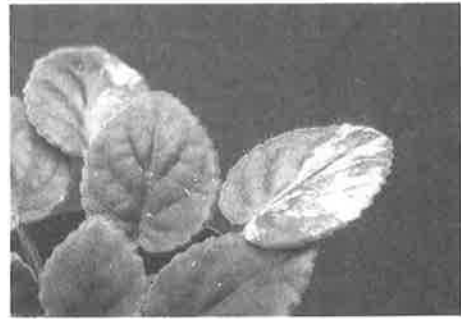


写真2 S. ionantha (斑入り)

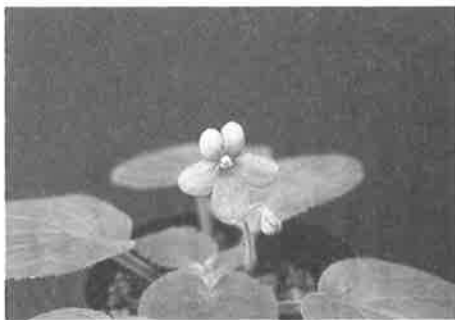


写真3 S. grandifolia #237



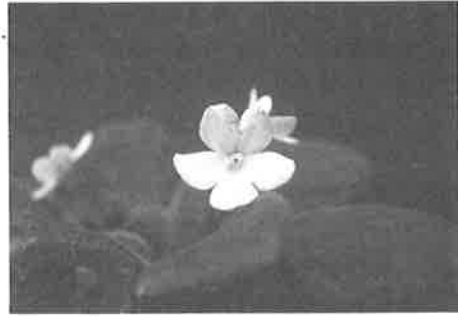
写真4 S. goetzeana

表 アメリカから導入したセントポリアの野生種及び園芸品種とその特徴

品 種 名	花 色	葉 形	葉 色	葉表面の毛	そ の 他 の 特 徴
<i>Saintpaulia breviflora</i> B. L. Burtt	紫	楕円に近い心形	緑	開出毛が密	保有株に比べ花、葉とも小ぶりで濃色 葉に保有株のような反りがなく滑らか
<i>S. confusa</i> B. L. Burtt	濃紫	心形	緑	長開出毛が疎	
<i>S. difficilis</i> B. L. Burtt	濃紫	楕円に近い心形	緑～黄緑	長開出毛、短伏毛	保有株ほど葉柄が伸びない
<i>S. diplotricha</i> B. L. Burtt	白に近い薄紫	心形	深緑、裏淡緑	長開出毛が疎	基本種又は var. <i>diplotricha</i> より葉が小さく、株もコンパクト
<i>S. d. var. parker</i>	白に近い薄紫	細めの心形	ほぼ黒、裏赤	短開出毛が疎	保有株より花色が濃い
<i>S. d. var. punter</i> B. L. Burtt	紫	丸に近い心形	深緑	開出毛	小さな葉で葉柄が短く、腋芽をよく出しこんもりする
<i>S. goetzeana</i> Engl.	濃青紫	心形	暗緑色、裏赤	短開出毛	保有株より葉表面の起伏が激しく花色が濃い
<i>S. grandifolia</i> B. L. Burtt	薄青紫	楕円に近い心形	緑～黄緑	短開出毛	葉表面が <i>grandifolia</i> に比べ平坦
<i>S. g. #237</i>	薄青紫	楕円に近い心形	黄緑	開出毛	
<i>S. grotei</i> Engl.	薄青紫	楕円に近い心形	緑～濃黄緑	長・短伏毛が密	保有株より全体が濃色でかつちりちりしている
<i>S. g. cv. Amazon</i>	青紫	円に近い心形	濃緑	短伏毛が密	
<i>S. intermedia</i> B. L. Burtt	青紫	ほぼ円形の心形	ほぼ黒	短開出毛が密	
<i>S. ionantha</i> H. Wendl.	薄青紫	円に近い心形	暗緑、裏淡赤紫	長開出毛	
<i>S. magungensis</i> var. <i>minima</i> B. L. Burtt	青紫	心形	緑	短伏毛が疎	保有株より葉が小さくきゃしゃ
<i>S. m. var. occidentalis</i> B. L. Burtt	白に近い薄紫	菱形に近い心形	深緑、裏淡赤紫	短伏毛が疎	保有株より葉緑が波状に反る
<i>S. nitida</i> B. L. Burtt	青紫	円形の心形	緑	短伏毛が疎	
<i>S. orbicularis</i> B. L. Burtt	白に近い薄紫	楕円に近い心形	緑	長・短伏毛	
<i>S. o. var. purpurea</i> B. L. Burtt	濃紫	楕円に近い心形	緑	短伏毛が密	保有株ほど葉に丸みがなく細く小ぶり
<i>S. pendula</i> B. L. Burtt		心形	緑	長開出毛が密	保有株ほど葉表面の艶がない
<i>S. p. var. kizarae</i> B. L. Burtt		心形	緑	短開出毛が密	
<i>S. rupicola</i> B. L. Burtt	薄青紫	細めの心形	緑	短開出毛	
<i>S. shumensis</i> B. L. Burtt	薄紫	ほぼ円形の心形	緑	開出毛が疎	
<i>S. tetensis</i> B. L. Burtt	薄紫	楕円に近い心形	深緑、裏赤紫	長伏毛が密	保有株より葉が長大で濃色
<i>S. tongwensis</i> B. L. Burtt	濃青紫	楕円に近い心形	暗緑、裏淡赤	長開出毛が疎	保有株に比べ葉が小さく葉柄も短い
<i>S. velutina</i> B. L. Burtt	濃青紫	ほぼ円形	暗緑、裏濃赤紫	長開出毛が疎	保有株に比べ葉縁が著しく外へ反る
<i>S. v. cv. Amazon</i>	白、中心青紫	円に近い心形	ほぼ黒、裏濃赤	開出毛	ミ二種
<i>S. v. cv. Light</i>	薄青紫	ほぼ円形の心形	暗緑、裏赤紫	長開出毛が疎	<i>ionantha</i> に似る
<i>S. House of Amani</i>	青紫	細めの心形	暗緑、裏淡赤	開出毛	主脈に鮮緑色の筋が入る
<i>S. Sigi Falls</i>	薄青紫	楕円に近い心形	深緑、淡赤紫	長開出毛が密	葉柄・花柄とも長く葉も大きく、花はやや抱え咲きとなる
<i>S. Robertson</i>	薄青紫	楕円に近い心形	黄緑	開出毛	多湿を好むのが葉が固くなりやすく、株形が整えにくい
<i>S. White ionantha</i>	白	菱形に近い心形	深緑	短開出毛が密	



S. Robertson



S. White ionantha

平成7年度花壇管理状況

飯塚 康博

平成7年度は大花壇で4回、その他の花壇で2、3回の植え付けを行なった(表参照)。

植え付けた草花は、18種類、45,734株である。

概要及び所感

(1) 模様については、図のように直線を利用したもの、円を基調としたものを、それぞれの花壇に用いた。

(2) 植物については、6年度とほとんど同じものを用いた。6年度の反省から(第17号参照)管理を徹底させたため、今年度のできばえは、概ね良好であった。品種ごとにその生育状況を報告する。

まず、ペゴニア・センパフローレンスであるが、例年、白色花の傷みが激しいことから面積を狭くし、補植のしやすい位置に配植した。その結果、維持管理が容易になった。

マリーゴールドは、花柄を取る以外はほとんど手間がかからず、花が次々と咲いた。ただし、ペゴニア・センパフローレンスとの混植は、色合いが良くなかったので、今後はデザイン面で工夫が必要であると感じた。

ニチニチソウもよく花が咲き、見事な花壇となったが、梅雨明けごろ肥料不足になったので、今後の植え付けにあたっては、追肥を行う必要

がある。

サルビア・ファリナケアは、植え付ける時の苗が多少貧弱であったが、10月には立派な株に育ち、次のポットマムに植え替えるにはもったいないほどのできばえとなった。実際他の花壇は、11月下旬に植え替えを行うのに対し、例年、大花壇は1ヶ月早く植え替えているが、サルビア・ファリナケアならば、もう1ヶ月は花壇で使ってもよいと思われる。今後は、そのサルビア・ファリナケアの有効利用も検討したい。

アゲラタムは、6年度と同様、花がつかない状態での植え付けとなった。今年度は株が植え付けを行うのに十分な大きさになっていたにもかかわらず、花がほとんど咲いていなかった。原因は、はっきりしなかったが、上部をピンチして株の大きさを整え、植え付け時期を10日遅らせた。その後、約2週間で70%が開花した。

サルビアは、苗が小さめだったが、植え付け後の花つきがよく、赤がよく映えた。

コリウスは、10月上旬に一度刈り込んだため、倒れずに11月下旬まで観賞できた。

ダイアンサス、テランセラ、トレニアは、特に問題なく、11月下旬まで観賞できた。

ビオラ、クリサンセマム‘ノースポール’は、例年どおり花もちがよく、5月上旬まで観賞できた。

パンジーは、今年度も灰色かび病が見られたが、早めにスミブレンド水和剤を用いて薬剤散布を行った結果、5月上旬まで観賞できた。